

宮城学院女子大学

Partir

[パルティール]

VOL. 18

2014.10

あなたのこれからに贈りたい
Live Letter from MG



01 誌上セミ

読み比べて探る
「俊寛」の魅力

05 学問へのいざない

「行動の裏にあるもの」を学ぶ
「DISCOURSE(談話)の
大切さ」を学ぶ

07 特集

企業トップのメッセージを人生設計のヒントに

「生き方」を考えるキャリア支援

09 ACTION

文化がある、学びの場がある…
ゆたかな地域づくりのために

11 My way MG way

卒業生の仕事場訪問

13 サークル紹介

14 CAMPUS NEWS

15 MGにこの人あり

「ジャーナル・J・ランデイス」

「Partir(パルティール)」はフランス語で「出発する」
新しい時代に飛び立とうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

読み比べて探る

「俊寛」の魅力

く三つの物語に描かれた悲哀と絶望、そして未来への希望

能や浄瑠璃、後の芸能へ多大な影響
「滅びの文学」が生んだ俊寛とは

深澤 私たちの日本文化演習では、中世
および近世の文学や芸能を読み解き、発
表やディスカッションを通して作品への理解
を深めていきます。

今年のテーマは「平家の世界の芸能



深澤昌夫教授

史」。中でも俊寛という人物にスポットを
当て、原作である平家物語、謡曲(能)、
浄瑠璃(あるいは歌舞伎)、それぞれのジ
ヤルにおいて何がどのように描かれている
か、違いはどんなところかを考察してい
るところです。

いずれも後世に残る優れた文学である
と同時に、平家物語は琵琶法師によっ
て、謡曲は能の舞台で、浄瑠璃は人形、
歌舞伎は役者によって演じられた芸能で
もありません。鎌倉、室町、江戸時代、そし
て現在に至るまで、人々に愛され続ける
俊寛の物語には、どんな魅力があるので
しょう。

それぞれのグループごとに感じたことを

日本文学科

深澤昌夫教授

[2年日本文化演習の皆さん]

菅原春菜さん 伊藤実紅さん
大松真菜さん 熊谷里穂さん
佐藤唯香さん 鈴木美緒さん



聞いてみたいと思います。

菅原 私たちは、平家物語を担当しました。俊寛は「鬼界島」の部分に登場しますが、「都に帰りたい」という悲しみがうまうま表現されていて、読む人も感情移入しやすいと思います。ただ逆に言えば、悲しんでいるだけという印象があまりに強く、それ以外の人間味は感じられませんでした。

伊藤 私も、俊寛がかわいそうというイメージを持ちました。けれど、流罪となった三人のうち、彼だけが信仰心がなかったというエピソードを読み、それが一人だけ都へ戻れない結末に結びついたのではないかと感じました。仕方がないというか、同情する余地がないというか。

深澤 平家物語は多くの減びが淡々と描かれ、俊寛の物語もそのつ。僧侶なのに信仰心がなく、清盛を裏切つて島流しになつてしまった。いわば自業自得、同情するには少し距離があるということですね。

それでも後の作品に取り上げられるのは、心惹かれる何かがあるから。それが二人とも印象深いと言つた悲しみです。同時に流された三人のうち、都に戻れたのは成経と康頼の二人だけ。俊寛一人が残されてしまう。この上ない悲哀が、読む人、観る人の心をとらえて離さないでしょう。

絶望の淵に立つた俊寛の心の叫びを美しい言葉で表現する謡曲

深澤 謡曲や浄瑠璃は、平家物語をベースにした二次創作ともいえます。平家物語から時代を下つて読み進んでみましょう。まずは謡曲について、俊寛の人物描写や物語の背景など、気づいた点や特徴を感想を交えて聞いていきましょう。

大松 私たちが担当した謡曲の俊寛は、ほかの作品と比べても、とにかく「なぜ私だけ」という悲劇性が強調されている印象です。都とかけ離れた地獄のような場

所に、たった一人残されるのは本当に悲しく辛いだろうなと思えました。

熊谷 私は最後のシーンを担当したので、絶望感がより際立っているように感じました。謡曲は、ほかの作品と比べると、登場人物がとて少ないんです。だからこそ、俊寛一人の気持ちにぐっと引き込まれ



菅原春菜さん



伊藤実紅さん





鈴木美緒さん



大松真菜さん

る感覚で、帰りたいのに帰れない悲壮感、絶望感を強く感じました。

深澤 言葉も通じず、食べ物もない所に残される、死と直結した状況。帰りたいというのは生きたいということ。それが叶わないわけですからね。

また、謡曲は島に流されたところから物語が始まります。平家物語と比べると、被害者性が強調されているとも言えますね。

大松 一方で、セリフの言い回しに掛詞などを使っていて、とても美しいと思いました。なぜ自分だけという憤りや悲しみが、言葉によって豊かに表現されています。

深澤 平家物語では、子どもが駄々をこねるように暴れる「足摺」という表現が使われていますが、謡曲では俊寛の感情が言葉でスマートに表現されています。能は能面をつけて演じるため厳かで近寄りがたイメージがあるかもしれませんが、読んでみるとそんな新しい発見もあります。

**共感を呼ぶ人間味と恋のエッセンス
絶望を希望にかえる劇的な結末**

深澤 それでは、浄瑠璃の俊寛はどのような

に描かれていますか。

鈴木 近松門左衛門の浄瑠璃では、流人同士がとても仲良く、地獄のような島にいるとは思えないほのぼのとした雰囲気が出されています。また、千鳥という女性との出会いをきっかけに、都にいる妻への俊寛の深い愛情を知ることでもできました。悲しみ以外のさまざまな面が描かれたことで、親しみやすい印象を持ちました。

深澤 人間的な描写が多くなされることで、個々のキャラクターに血が通ってきまして、近松の俊寛には、笑いと恋という浄瑠璃らしい要素が加えられています。中でも千鳥という存在は際立っており、他の作品には全く見られないものです。

佐藤 千鳥の存在が、俊寛をはじめ登場人物に大きな影響を与えたと思います。恋は、自分以外の人を思う気持ち。そこから生まれた温かな人間味が、他と異なる作品の立体感につながっていると感じま

した。

深澤 平家物語や謡曲と読み比べると、近松の俊寛はかなり設定を変えていることがわかります。三人の流人は互いに心を許し合い、まるで家族のよう。成経が千鳥と恋に落ちることで、物語は新たに動き出します。使者の計らいで俊寛も都へ戻れることになった展開も他と大きく違います。結局俊寛はその権利を千鳥に譲るのですが、そこにどんな思いがあったのでしょうか。

鈴木 妻が殺され、都に戻る意味をなくしてしまつた。そこで自分が果たせない未来を若い二人に託そうと考えたのでは。

佐藤 千鳥にとつて、好きな成経と一緒に都へ行けないのは絶望そのもの。その気持ちを酌んで自分から一人島に残つたということは、俊寛にとってある種救いだつたかもしれません。

深澤 物語に恋の要素を盛り込む



ことで、未来への希望が見えてきました。しかし状況がそれを許さない。俊寛はそこを打ち破り、家族のような仲間のためにわが身を犠牲にしたんですね。まさにドラマチックな結末。江戸時代の芝居は女性ファンも多かったため、このように感情が揺さぶられる話が好まれたのでしょね。

古典から現代まで興味の幅を広げて 日本文化の素晴らしさに触れる

深澤 基本的なストーリーや島に一人残される結末は、三作品ともほぼ同じですが、それぞれ違った味わいがありますね。



平家物語から生まれた俊寛は、謡曲では不条理ゆえの悲劇性を表現。一方浄瑠璃では俊寛が一人島に残った理由にフォーカスし、別の角度から新たな物語がつけられています。

実は、明治以降の作家も俊寛の後日談を書いているんですよ。

伊藤 芥川龍之介や菊池寛が書いたという後日談は、どんなストーリー展開になっているのか気になりますね。オリジナルの平家物語にも、俊寛の後日談が少しだけ載っていました。それを元に、文豪たちがどんな二次創作に挑戦しているのか、ぜひ読んでみたいです。

深澤 文豪たちでさえ書かずにはいられなかった俊寛の物語。いかに魅力的な題材であったかということですね。

ほかに、皆さんが気になった点やもっと調べてみたい部分はありますか。

熊谷 同じような表現をしているも、作品によって演じ方や解釈が少しずつ違う部



佐藤唯香さん



熊谷里穂さん

分があり、もっと調べてみたいと思います。例えば、別れを暗示する水杯のシーンで水をつぐ人が違っていたり、鬼界島の「鬼」が何を指しているのかなど、細かい部分ですが面白味を感じました。

菅原 授業の中で、歌舞伎や能などさまざまな俊寛を見せていただきました。そ

の中で、一人だけ最後のシーンを笑顔で終わらせていた役者さんがいたんですね。その笑顔が何を意味しているのか、ずっと気になっていた

ので、今回のディスカッションを機に考えてみたいと思います。

深澤 俊寛は今もよく上演されているので、実際に鑑賞されることをお勧めします。役者が変わればまた違った印象を持つと思いますし、そのたび新鮮な感動を味わえるはずですよ。

みなさんもぜひ、折に触れてさまざまな文学や芸能を楽しんでください。この演習をきっかけに、日本文化の新たな魅力発見につながればうれしいです。





「行動の裏にあるもの」を学ぶ

心理行動学科 工藤敏巳 教授

ソフトテニスの動きと心理を 数理科学的に解明

主にスポーツ心理学、運動心理学を専門にしています。基礎的な研究に加えて、現在、日本オリンピック委員会の情報戦略スタッフや日本ソフトテニス連盟強化委員会のスポーツ医科学部会委員になっていて、選手と関わりながら心理面のサポート・トレーニング支援、戦略支援などを行っています。

例えば、選手の得失点とメンタルとの関係を分析したり、選手の移動の方向や距離を解析し、トレーニングに活かしてもらうという取り組みもしています。

また、海外に行つて対戦国の選手の映像を撮影し、独自に開発したゲーム分析ソフトで解析します。具体的には、試合中のボールの落下位置を入力し、打球コースの傾向を導き出し、日本代表選手

に提供します。

1打で勝敗が決定してしまう競技なので、こうした仕事の90%は無駄になってしまう場合があります。しかし、分析成果によっては、メダルが金になるか銀になるかが決まります。選手の人生を大きく変えてしまうことを考えると、かなり重要な仕事だと認識しています。

一見、遠回りに見えるかもしれないが、より確かな道を歩むことが一番の近道

ゼミでは、心理学の基礎知識を学習だけでなく、多岐にわたる研究方法を中心に学んでいきます。「行動の裏にあるもの」を見つけるためには、行動をより客観的に計測できなければいけません。例えば、人の動作や表情から感情を推定するとき、動きや表情の違いを正確に計測する必要があります。もし、その計測方法がわからなければ、到底、こ



ういう研究はできませんね。今年の卒業研究では、フリーエ解析という手法を用いて手のしわから年齢を推定する研究をしている学生がいます。また、OKAOV i s i o n という視線計測デバイスを活用して、視線の動きから日本語が入力できるソフトを開発しようとしている学生もいます。

扱うテーマは多岐にわたっていますが、しっかりとした方法で研究を進められるよう、学生たちは苦手なPCを駆使して日々頑張っています。

Profile

北海道出身。筑波大学大学院修士課程体育研究科。体育学修士。1986年本学に赴任。
○信条「信条・信念などはありません。そういう生き方がある意味、信条かもしれません。」

私のおすすめ本

群れは意識をもつ 郡司ベギオ一幸夫著

鳥や魚などの群れを数理科学で解明しようという興味深い本です。どのようなシステムによって群れが作られるのかを科学的にアプローチする技術を学べます。人間の集団に関係づけられないか?と考えることも面白いと思います。



これが学びのツボ!

最近、話を聞けない学生が増えていますね。時間を輪切りして瞬間を取ってみると、話を聞ける人と聞けない人との差に大きな違いはないのですが、何年も経つと大きな差になってしまいます。そして会話の時には、周囲を見渡すよう努めてください。気遣いは大事です。



「DISCOURSE (談話) の大切さ」を学ぶ

英文学科 ジョアンメイ サトウ 准教授

英語の習得において

DISCOURSE(談話)の効果を研究

私は今大学で英会話の授業を担当していますが、DISCOURSE(談話)を大切にしています。算数を教えるように英語を教えるわけにはいきません。ディスカッションやインタラクティブ(相互のやりとり)が必要で、そのために教師の効果的な質問が大切です。

質問には「クローズドクエスチョン」と「オープンクエスチョン」があります。クローズドクエスチョンは、答えが「はい」「いいえ」しかない質問で、オープンクエスチョンは、「あなたはどんな本が好きですか?」というような質問で、会話が弾むきっかけになります。

さらに授業では、新聞からトピックスを選び、学生たちにリサーチしてもらい自分の意見を交えてディスカッションしても

らうこともしています。

本学は15〜20人くらいの少人数の講座になっていて深いディスカッションができる環境にあります。私自身がディスカッションに加わり、ポジティブなフィードバックをするように心がけていて、これが学生たちの英会話に対するモチベーションにつながります。

普通に身に付くものではない 英語にポジティブに接する必要

学生たちは簡単に英語ができるようになると思っていますが、英語の音楽を聴いているだけで、英会話の能力が伸びると考えているのは間違いで、能動性が必要です。

例えばスマートフォン。身近な友達とだけコミュニケーションしているのではもったいないですね。工夫次第で英語に接する機会を増やすことができます。

YouTubeでトークショーのインタビューを聴いたり、ツイッターやFacebookも英語のものがあるので意識的に使ってみることも大切です。

海外の人々とスカイプでやりとりしている学生もいますが、こちらから最小限のサジェスチョンだけにして、基本は学生に自分で考えて行動してもらうことを大前提にしています。

自分でどんな人になりたいか?を強く持つて、プロアクティブにゴールに向かって努力して欲しいですね。



Profile

イギリス・リーズ出身。バーミンガム大学大学院修了。MATEFL (Teaching English as a Foreign Language)。桜の聖母短期大学助教を経て、2014年から現職。

○信条「positivity(前向き)」、「never give up(あきらめない)」

私のおすすめ本

Interaction in the Language Curriculum

Leo van Lier 著

言語教育においてインターアクション(相互作用)の必要性を説いた本です。一人の学生が勉強するとパートナーも勉強になる。他の学生に教えると自分も勉強になる。言語習得におけるコミュニティシステムを学ぶことができます。



これが学びのツボ!

日本の学生はリーディングが苦手です。リーディング能力を伸ばすには簡単な本を選んで多読することです。授業では読書記録手帳をつけてもらっています。英字新聞の決まったコーナーを継続的に読むということも効果があります。

「生き方」を考える キャリア支援

女子学生の就職活動がますます多様化する現在、本学では学生部が中心となり、各年次に合わせた多彩なキャリアサポートプログラムを展開しています。今年度は、これまでのきめ細かな支援体制を継続しながら、自分自身の生き方そのものを考える機会を提案しようと、新たな企画を立ち上げました。今回の特集は、その取り組みについてご紹介します。



(株) 楽天野球団立花社長による第1回講演。会場に集まった学生たちは熱心に聞き入り、立ち見ができるほどの盛況ぶりでした

「働くこと」は 「生きること」そのもの

学生部委員会およびサポートセンターでは教職員が一丸となり、一人ひとりの希望を尊重した就職活動をサポートしています。これまで各種セミナーやOGとの集いカフェ、ジュニアアドバイザー制度等、さまざまなプログラムを通して学生たちの夢の実現につなげてきました。

就職活動というと、エントリーシートの書き方や面接のマナーなど、ハウツーを身につけることから始まるように思われがちですが、キャリアデザインにおいて最も大切なのは、自分自身がどう生きるかを考えてみることです。なぜなら、人は社会と関わりながら成長し、実りある豊かな人生を切りひらくことができるからです。

多様な生き方を学び 未来の自分を描く

今回、私たちはキャリアサポートの原点に立ち、学生が自ら生き方を考える機会づくりに取り組みました。それが新企画「企業のトップに聞く」。企業を率いる方々の生き方に触れ、学生たちには人生設計のヒントをたくさん得てほしいと思います。本学は地元就職率が高いため、地域を縁の下で支える人々と出会う場も重要であると考えました。

また、1回限りでなくシリーズ化という点にもこだわっています。それぞれの企業に社会的役割があり、その中でやりがいを持って働く素晴らしさを知ってほしいと思ったからです。様々な企業のトップの方々の力強いメッセージには、必ず得るものがあるはず。学年にかかわらず、多くの学生に足を運んでもらいたいですね。

学生と社会との 接点を広げていく

今回の企画が縁となり、本学も地元企業とこれまで以上に深い関係を築きつつあります。既に成果も出始めており、食品栄養学科の学生がプロデュースしたお弁当を、楽天の本拠地・コボスタ宮城で販売することが決定しました。

そして10月の大学祭では、「トップに聞く」特別版として、震災から再生した企業と学生がコラボレーションした取り組みも紹介します。

今後もこのネットワークを大切に、企業と大学が積極的な連携を図り、学生が生き方を考える上で良い刺激になる出会いをつくっていきたいと考えています。



学生部長
磯部裕子(児童教育学科教授)



キャリアサポート特別企画 シリーズ講演会 企業のトップに聞く

宮城・仙台を代表する企業のトップを招き、現職に至るまでの経歴や仕事への思い、企業が求める人材等について語っていただく新企画。今年度は11月まで計5回開催します。



第1回 (6月3日開催)

テーマ 「日本一愛される球団を目指して」

株式会社楽天野球団
代表取締役社長 立花陽三氏



従来のプロ野球ファンだけでなく、女性を含む幅広い層へのファン拡大を目指す東北楽天ゴールデンイーグルス。地元東北の大学生と連携した球界初の「イーグルスキャンパスアンバサダー」をはじめ、多くの人にスタジアムへ足を運ん

でもう取り組みについてお話をいただきました。「日本一愛される球団」を合言葉に、スポーツを通して最高の満足を提供したいと語る立花社長。その熱い思いに会場全体が感動に包まれました。

第2回 (7月15日開催)

テーマ 「スタッフの技と味を信じて～グルメなリーダーの美味しい話～」

仙台国際ホテル株式会社
代表取締役社長 野口育男氏



厳しい経営状態から、徹底した「顧客目線のおもてなし」とスタッフの「人間力育成」により、奇跡的な再建を果たした仙台国際ホテル。趣味の食べ歩きをはじめ、長年の豊富な経験が現在のリーダーシップに生きているという野口社長から、ホテル再建秘話を伺いました。最後にアドバイスとして贈られた「楽な道より試練の道を選んだ者にこそ、素晴らしいチャンスが訪れる」という言葉は、多くの学生の心に響いたことでしょう。

「企業のトップに聞く」今後の講演スケジュール

- 第3回(10月6日開催).....お茶の井ヶ田株式会社 常務取締役 今野順子氏
- 第4回(11月1日開催).....株式会社仙台銀行 相談役 三井精一氏
- 第5回(11月17日開催).....株式会社河北新報社 代表取締役社長 一力雅彦氏

学生たちにとって大先輩でもある今野氏をはじめ、本学にゆかりある地元企業のトップをお招きします。第3回以降は保護者の皆さんにも公開。生きること、働くことについて改めて見つめ直し、お子さんの未来を共に考えるきっかけになればと思います。

受講生の声

英文学科1年 今井杏奈さん

幼い頃からキャビンアテンダントに憧れてきた私は、とにかく英語力をつけようと考え英文学科へ進学しました。素晴らしい経営者であるお二人の話を伺って、努力を惜みず頑張り続ければ、必ず道は開けると実感。とても励みになりました。これからも航空業界で活躍する先輩たちを目標に、TOEICのスコアアップなど、自分をいっそう磨いて夢の実現につなげたいと思います。



英文学科1年 大友里穂さん

私は好きな英語を生かした仕事に就きたいと考えています。講演会で企業トップの方の思いを聞き、何事も経験を積むことが大切だと感じました。今後は自分の可能性を試す意味でも、以前から興味があった海外留学にチャレンジしたいと思います。1年生なので具体的な就職活動はまだ先ですが、将来に向けた心構えを学べたことは大きな収穫です。これからもキャリアサポートの取り組みに期待しています。

Action

文化がある、学びの場がある… ゆたかな地域づくりのために

文化があるから、人はゆたかになれる。

学びの場があるから、街は素敵になれる。

本学では様々な文化発信の場や学びの場を
地域の人々と共有しています。

この街がもっと素敵にゆたかになるように…



サマーカレッジ

広大なキャンパスで「学び、遊び、表現する」2日間！ 「小学生のためのサマーカレッジ2014」開催！

大学ならではの「学び」と「遊び」を小学生が体験する総合型イベント「小学生のためのサマーカレッジ2014」が、8月4・5日の2日間開催されました。4回目を数える今回は、県内外から67名が参加しました。

初日は「自然を楽しむ、新たな感覚の世界を拓く」がテーマの表現講座。みんなで散策した森の遊歩道のイメー



ジを、木の葉などを画材に使用して描いた「うちわ」を作成しました。2日目は本学の教授陣が、各々の専門性をいかした体験型講座を開講。子どもたちは科学、音楽、調理、英語などの中から興味のある講座を選択し、キャンパス内各所で遊びを通しての学びを体験しました。ほかにも、おいしくて栄養たっぷりのランチに舌鼓をうったり、芝生でサッカーをしたり、ピアノ池でいかだにのったり、キャンパス内を満喫しました。



弦楽器専攻生と小さな音楽家との共演！ 「虹色のシンフォニー演奏会」開催

宮城学院女子大学音楽科の弦楽器専攻生による自主活動団体「虹色のシンフォニー」。彼女たちが中心となり、仙台市内の幼稚園〜高校生までの「小さな音楽家」をソリストとして迎え、一緒に音楽を楽しむコンサート「虹色のシンフォニー演奏会」が、8月11日（日）、戦災復興記念館で開催されました。



当日、小さな音楽家たちはベートーヴェンやモーツァルト、バッハなどの馴染みのある曲を披露。弦楽器専攻生たちも、子どもたちとの共演を心から楽しんでいました。会場に集まった方々からは、演奏が終わる度、たくさんの拍手が送られていました。



2014年度さくら寮祭 「笹の葉さらさら七夕まつり」が開催されました

昨年4月、青葉区桜ヶ丘に完成したさくら寮。7月6日の日曜日に今年度のさくら寮祭「笹の葉さらさら七夕まつり」が開催されました。

当日は、親子連れや地域の方々など、たくさんの方々やさくら寮を訪問。会場

では、寮生たちが企画したクイズや心理テストをはじめ、歌や演奏、紙芝居、童話の読み聞かせなど、さまざまな催し物も行われ、来場された方々と共に寮生も盛りだくさんのプログラムを満喫しました。子どもたちは、短冊に思い思いの願いごとを記し、七夕の楽しい日を過ごしました。





東北放送アナウンサー
藤沢智子さん

1対1のコミュニケーション
いつもそばに寄りそう
ラジオでありたい



[取材]
広報室インターンスタッフ
山下由佳莉 (心理行動科学科3年)

—どのようなきっかけでアナウンサーになられたのですか？

小学校5・6年生の時に放送委員会に入っていました。母校の上杉山小学校は放送のモデル校になっていてテレビカメラと録画室があり、私はアナウンサーをさせてもらっていました。本番前に5、4、3、2、1とカウントダウンしていく緊張感が楽しかったし、みんなで力を合わせて作りあげる喜びを感じ、将来こういう仕事に就きたいなと思いました。

高校・大学と将来アナウンサーになるんだという目標を持って放送局でのアルバイトを続けていました。

—ラジオの仕事の魅力は何ですか？

ラジオは1対1なんです。聞いている人と私との関係なんです。「今あなたと話をしている」というように話せるのがラジオなんです。だから初めてあった人でもラジオネームを聞くと「あーいつもお世話になってます」と自然に言えます。

常に自分をさらけ出さないとダメですね。



「寄り添うメディアがラジオなんです」とやさしく語りかけるような口調で話す藤沢さん



標準語に置き換えられない仙台弁を記した「仙台弁かるた」。現在、第2弾が好評発売中!



「緊張しない秘訣は?」という問いに、藤沢さんは「(緊張の)原因である不安を取り除く万全の準備をする」とアドバイス

ホネを言い合って近い関係を作っていくわけですから、面白いですね。その自分自身を問われることになりましたけれど。

—震災時にラジオの大切さが見直されたと思いますが。

あの時、まっくらで無音の状態でした。「この世に私しかないのでは」という孤独感を感じた人も多いと思います。そんな時、いつもラジオで聞いているパーソナリティの声で今起きていることが伝わって、ささやかな安心感になったと思いますし、なんとなく頑張れるという気持ちになれたのではないのでしょうか？

知っている人の声で今を伝えるラジオ。同じ時間をちゃんと共有している人がいるということを感じられたのがラジオだったのだと思います。

—「いずい」を全国に広める会や「仙台弁かるた」を作られていますね。

「仙台は転勤族が多い。困るのは言葉だ」と考えて、ラジオで仙台弁を勉強し

てもらおうと初級仙台弁講座を始めました。私自身もあまり知らなかったので、辞書とか資料とかをさがして毎週テキストを作っていました。その中で、「いずい」のような素敵な言葉に気づきました。語源は「いずい」という古語。標準語には置き換えられない言葉です。「仙台弁かるた」には、「いずい」や「たごまる」などの言葉が入っています。読み札はリスナーから寄せられたもので作っています。

—これからラジオを通してどんなことを伝えていきたいですか？

今、人間が本来持っている力が退化しているのでは？ 昔だったら周りの話を聞きながら仕事をできたのですが、今の若い人は他の人の話が入ってこなかったり、ひとつのことしかできなかつたりするようですよ。

音だけのラジオを聴くことで、想像力や五感を育てることができると思います。そんな五感を磨くためにラジオを聞いて欲しいと思います。また、そういうラジオでありたいと思っています。

Profile 藤沢智子さん

1979年3月、宮城学院女子短期大学教養科卒。同年4月、東北放送株式会社入社。2010年4月、報道制作局アナウンス部長。2014年4月、ラジオ局長兼アナウンス部長。現在、COLORS(水)(2005年4月～)、チアーズヴォイス(毎週土曜日午後0:45～)(東北6局ネット)、3・11みやぎホットライン(月曜夜8時～)を担当。

東北放送株式会社

〒982-0831

仙台市太白区八木山香澄町26番1号

TEL022-229-1111(代)

ホームページ

<http://www.tbc-sendai.co.jp/>

サークル紹介 01

バレーボール部

- 部員数: 15名
- 活動日: 毎週月曜
- 活動場所: 大学体育館

経験者も未経験者も一緒に 和気あいあいと活動中!

一般的な体育会のように厳しいものではなく、経験者も未経験者も一緒になって、楽しくワイワイと活動しています。部長の私自身もバレー未経験者なので、経験者の後輩から技術的なアドバイスをもらったりしています。それとは逆に、学校や授業のことなどキャンパスライフに関することは、先輩の私が後輩に対してさまざまなアドバイスをしています。学年の垣根を超えて仲良くできているのには、こんな理由があるんです!

目標は、大会に出場して1勝すること!

過去は、さまざまな大会で優勝するほどの強豪チームだったそうですが、現在のチームは大会に出場することはなく、練習のみの活動です。しかしメンバー同士でも「やるからには大会に出場して、勝ちたい!」という声が出ています。身近な目標としては、小さな大会でも構わないので、まず大会に出場すること。そしてその中で「勝つこと」の喜びもメンバー同士で共有できれば、最高ですね。



バレー経験の有無を問わず、
楽しく活動しています!



メンバー同士、仲の良さと
団結です!



部長
菊池 香里さん
(英文学科2年)



音楽好きな人も、聴く人も
楽しいセッションです!



音楽好きが集まって
楽しいセッションができています!

サークル紹介 02

M.G.sing Mates

- 部員数: 67名
- 活動日: 毎週火曜・水曜・金曜
- 活動場所: サークル棟

邦楽・洋楽問わず 多様なジャンルの曲を楽しくセッション!

軽音サークル「M.G.sing Mates」は音楽好きが集まった集団で、学内での活動に加えて月に1~2度、他大学の軽音サークルと合同ライブを開催しています。演奏する人も聴く人も楽しめるのが、ライブの一番の魅力です。ピアノや弦楽器など、過去に演奏歴のあるメンバーもいますが、入学後にギターやベースを演奏し始めたメンバーも多くいます。また演奏するジャンルも多様で、お気に入りバンドのコピーなど、邦楽・洋楽を問わず楽しくセッションしています。

演奏家として、そして人間としての成長がモットー

活動する上で心がけているのは“個人としての成長”です。一演奏家として、各々の技術向上はもちろんですが、それ以前に一人の人間として成長することを大切にしています。これからの目標は、宮城学院女子大学出身のアーティストがメジャーデビューできるよう、積極的に活動していくことです。学園祭のゲストにOGのアーティストがやって来て、凱旋ライブを開催できたら、盛り上がること間違いナシですよ。

部長
浅井 冴恵さん
(生活文化デザイン学科3年)



日本文学科 2014年度 特別企画 第一弾
「唯川恵×池上冬樹 特別対談」が開催されました



6月25日(水)大学講堂で、直木賞作家・唯川恵さんと文芸評論家・池上冬樹(本学非常勤講師)さんによる特別対談が開催されました。会場には、日本文学科の学生をはじめとする本学の学生らに加えて、日本文学科のOG、生涯学習講座の受講生、一般参加者など、約400名が詰めかけました。

対談は唯川さんの作品について、さらにプライベートな話題や他の作家とのエピソードも披露されるなど、非常にバラエティに富んだ内容になりました。その後、参加者から寄せられた質問に、唯川さんが回答。小説を執筆する学生たちに、直木賞作家からの貴重なアドバイスもありました。終了後、ファンだという学生へのサインにも、快く応じてくれた唯川さん。興味深い話に加えて、人柄にも触れることのできた今回の特別対談でした。

「みやぎ銀鮭プロジェクト」をサポートする
「大塚商会ハートフル基金」の目録贈呈式が行われました

食品栄養学科の学生を中心とした有志によって発足し、「銀鮭養殖に関する漁業者を元気にしたい」「宮城の若い世代に銀鮭を知ってほしい」との思いから活動している「みやぎ銀鮭プロジェクト」。今回、株式会社大塚商会の「大塚商会ハートフル基金 復興応援プロジェクト」の助成を受けることになり、6月26日(木)目録の贈呈式が本学で行われました。大塚商会からは、取締役兼上席執行役員・森谷紀彦氏をはじめとする3名が、本学からは地域連携センター長・戸野塚厚子副学長、副センター長・平本福子教授、銀鮭プロジェクトメンバーの食品栄養学科4年西條明日香さん、菅原優花さんが出席しました。

まずは大塚商会から基金の趣旨等について説明があり、続いて西條さんと菅原さんが、銀鮭プロジェクトのこれまでの活動内容、今後の活動予定などを説明しました。大塚商会からのバックアップを受け、「みやぎ銀鮭プロジェクト」は今後、更に内容が充実したものになるはずですよ。



編集後記

昨夏は連日30度を超える猛暑、冬は記録的な大雪、そして今年の夏はまた例年になく大雨。西日本を中心に各地で洪水や土砂災害など大変な被害が広がっています。決して他人事とは思えません。皆様のお住まいの地域はいかがでしょう？

さて、パルティール第18号をお届けします。学科のイベント、学生たちのプロジェクト活動、授業、サークル、就職支援…、今回も盛り沢山です。本誌から、決して歴史と伝統と赤レンガだけではない、宮城学院の底力と自由闊達なチャレンジ精神を感じていただければ幸いです。(M・F)

公式 facebook ページ

www.facebook.com/mgu.ac.jp

タイムリーな情報発信とグローバルな交流の場を目指し、宮城学院女子大学公式 facebook ページが誕生しました。ぜひ「いいね!」をクリックして、国内外を問わず交流の場としてご活用ください。また、災害時には緊急連絡ページとして大学から情報を発信します。

携帯・スマートフォンはここからアクセスできます▶





ランディス先生は、戦後の宮城学院の復興を支援するために来日し、長く宮城学院と共に働いた宣教師です。

1953年(昭和28)、“Fellowship of Christian Reconstruction for Japan”(日本のキリスト教復興協力会)が募集したJ-3(Japan-Three Years)と呼ばれるリーダー役となり、3年任期で日本で英語を教えながら、様々な活動に奉仕できる能力を兼ね備えた若者として派遣されました。

ランディス先生は、宮城学院に赴任していたマーガレット・A・ガーナー先生の仙台での生活を綴った手紙により、奉仕の場所に宮城学院を選択します。そして6ヶ月間、授業を通して学生と共に過ごした経験から日本で生涯 宣教師として献身することを決意。その後、30年以上宮城学院を支えてくださいました。

先生の人生に影響を及ぼした「奉仕する(SERVE)」という言葉の通り、今日まで長きに渡り、宮城学院のために尽力されました。



ジャーネル・J・ランディス(Janell Jean Landis)先生 略歴

- 1926年(大正15)8月 米国ペンシルヴェニア州生まれ
- 1948年(昭和23) ハイデルバーグ大学卒業(語法、教育学専攻)
- 1948年(昭和23) イーデン神学校入学(キリスト教教育学専攻)
- 1953年(昭和28) 短期教育宣教師(J-3)として宮城学院に赴任
- 1958年(昭和33)4月 宮城学院女子大学・同短期大学助教授
- 1969年(昭和44) 宮城学院評議議員
- 1985年(昭和60) 宮城学院退職後、日本基督教団東北教区協力宣教師として活動



現在、米国テネシー州プレザント・ヒル(引退牧師宣教師コミュニティ)にて活躍

MG archives

ハンドベル贈呈式 1972年(昭和47)4月

ランディス先生から中高にハンドベルが寄贈されて以来、ハンドベル班が結成されました。現在クリスマス礼拝などの際には、欠かせないものとなっています。



ランディス館定礎式・献堂式 1999年(平成11)5月

中学校・高等学校の新館が建築された際、本学の建学に関わった宣教師たちの功績を称え、これを長く記憶するため、中学校・高等学校に馴染みの深い宣教師で、かつ英語教師であったジャーネル・J・ランディス先生にちなんで「ランディス館」と命名されました。

文・写真 宮城学院資料室